
たんぽぽ

石山ウルマ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たんぽぽ

【Zコード】

Z2493P

【作者名】

石山ウルマ。

【あらすじ】

陽子は花屋でアルバイトをするなんて、思っていなかった。

たんぽぽ

5年間勤めた銀行を辞めてから、一月ほどはのんびりとした時間を過ごした。

読みたかった本をまとめて読んだし、友達とお酒を飲みながら深夜まで話し込んだし、

お菓子作りにも挑戦してみた。

親には銀行を辞めた事は言えなかつた。

言えば父は怒つて「実家に戻つて、さつやと嫁に行け」と言つだらう。

さうに「どれだけ頭を下げて、採用してもうつたと思つているんだ」と言つだらう。

母は「辞めちやつても、お前は本当に馬鹿だね」それしか言わないだろ。ただし、いつまでも母はそれを繰り返す。

父も母も、私の平凡な寿退社を願う人たちだ。

そんな両親の娘への愛情も義理も、ただただ重たいだけ。

一月ほどはのんびり過ごせたけれど、それから先の日々は持て余す時間が苦しくなつた。

時計の秒針を見ると息苦しさを感じた。

死にたいとまでは思いつめなかつたけれど、生きていたくもなかつた。

テレビをつけないとワイドショーで『自殺は愚か者の決断だ』と語っていた。

軽い言葉に吐き氣がした。

生きていたくもないけれど、お腹がすけば何かを食べた。

私の身体は、脳とは違う行動を取らせている。不思議だなと思つ。

中学時代の担任は「簡単に不思議という言葉を使うな。探究心のな

さを不思議という言葉で片付けてはいけない」

そう教えたけれど、こんな自分のどこを探るすれば、答えが出るの

だろう。

生きていたくもないのに、お腹がすけば何かを食べる。
不思議だなと思う。

アルバイトをする気なんてなかた。

当分の間の生活費には困らないし、労働意欲なんてさりさり湧かな
かつた。

近所の花屋の花を見つめていた。

小さな店先に私の知らない花が沢山あつた。

私にはまだまだ知らないことが多いと思つた。

引き戸のガラスに『アルバイト募集中』の張り紙。

時給金額を読むと、とっても安い。

ボーナスだって無いし、有給休暇も無くてこの賃金かと思つと、世
の中の厳しさを改めて知つた。

その張り紙を見つめていたら、店内から女性が現れて

「アルバイト、お願いできませんか」

突然に声を掛けられて、一瞬、あっけに取られてしまった。

その女性はとても綺麗な人でした。

特に高価なものは身に着けてはいけないけれど、どこかセンスが良い
感じがした。

きっと細やかなところに、気配りが出来る人なんだろう。うらやま
しく思つ。

そして花屋に良く似合つ、やさしい雰囲気が漂つていた。

「時給、安くして申し訳ないんですけど、アルバイトお願ひできませんか」

私はいつたい何を見込まれたのか、解らなかつた。

『お願いできませんか』という言葉に私は戸惑つた。

「あら、『ごめんなさいね。勘違いでしたか、アルバイトを探しているのかと思つてしまつて。』『ごめんなさい』」

戸惑つている私に、その女性はそう言つて頭を下げてくれた。

「いいえ、別にそういうわけではないのです」

探究できぬ不思議なんて、結構身近に沢山あるのだと思う。私はその花屋でアルバイトを始めてしまつた。

美智子さん、32歳。この小さな花屋の女店長。

私よりも9歳上。たかが9歳、されど9歳。

美智子さんは、時には同級生の様であつて、時には手の届かない大人だつた。

花屋で働き出して、すぐに気づいた。

多種多様の花の香りが渦巻いている。その臭いは、あるいは混沌と沈殿している。

それは香りといふ言葉で言い表すよりも、臭いと言いたい位の不快感があつた。

それぞれの花が自己主張をして、臭い。

花屋なんて、可憐さを楽しみ通り過ぎるもので、店内に長く留まるべき所ではないと思つた。

「ねえ、陽子ちゃんはどんな花が好き」

「たんぽぽ」

美智子さんは笑いながら

「残念ね、このお店には置いてないもの」

これが同級生の美智子さん。

「別れた男も、たんぽぽが大好きだった。死んじやつたけれどね」

「事故ですか？」

「ううん、自殺」

これが大人の美智子さんの横顔。

ある日のこと、若い男性が花を買いに来た。

「好きな人に花を送りたいのですが、選んで戴けませんか」

それは20代後半と思える、笑顔のさわやかな人だった。

「その方は女性ですか」と尋ねたら

「ええ、勿論です。とても可愛らしい感じの人です」

はきはきとした声で伸びやかに言った。

予算を尋ねたら「いくらでも構いません」

悩みながらも私の好みで、花束をこしらえて差し上げた。3200円。

お釣りを渡したら

「この花をあなたに贈ります」と自分でこしらえたばかりの、花束を渡された。

嫌な感じ^{いや}がした、うれしくなかつた。この人のさわやかさも消えた。

その人に笑顔を贈る気持ちは、少しも湧かなかつた。

この男はこれから『私の驚きを計算して』花束を買ったのだ。

美智子さんにこの話をしたら

「それは勿体無いことをしたわね。それならもっと高価な花を選んでおけば良かつたわね。でも気にしないで、陽子ちゃんは可愛いから、可愛い子は徳ね。同じようなお客様はこれ方も続くわよ。男の発想なんて大体同じよ。気にしない、気にしない。陽子ちゃんのお陰で、売り上げは伸びる」

美智子さんはどこまで本気なのだろう。お店の売り上げを気にしたのだろうか、私を慰めたのだろうか。私を茶化したのだろうか。解らなかつた。

でも、可笑しくて一人で笑い合つてしまつた。

「ねえ陽子ちゃん、んせどいひして、たんぽぽが好きなの？」

「いつも身近に咲く花だから」

「でも、珍しさに欠けるじゃない」

「珍つねなんて書くやん、たん。

「同様に腹中も細かいことは見えぬ

「私には美智子さんが不思議ですよ」

美智子さんは、私が不思議に思った理由を聞いて来なかつた。

いつの間にか店内の、混沌とした臭いも気に成らなくなつていた。

卷之三

「お店に、たんぽぽの花、並べてみようか?」と相談してきた。

「冗談でしょう」

少し本気よ

「おお、うう、あら意地悪、二つも買はう」と云ふのです。

「それこ、たんぽぽを釘つ人なんて誰もいませんよ」

「アーティストが歌う歌の歌詞を書く」

卷之三

美智子さんは呑気に笑つうようで、それでいて寂しそうだった。

卷之三

גַּדְעָן-בְּנֵי-יִשְׂרָאֵל

美智子さんは、別れてその後死んでしまった男の人気が、今でも好き

なんだろうと思つた

卷之三

「それはどうかなあ」「

「私、勝手にそう思います」

「どうぞ、『勝手に』」

「ねえ美智子さん、いつの事このお店の名前を『たんぽぽ』に変えませんか」

思い切ってそう言ったあと、束の間の沈黙があった。

美智子さんはその時、何を見ていたのかは解らない。ぼんやりとした視線で中空を見つめているように見えた。私は美智子さんの顔ばかりを見つめていた。

「陽子ちゃん、それ良いね。そうしようか」とすると美智子さんの頬に涙がこぼれた。
「はい、良いと思います」

私は、店内に並べられた沢山の花を見ながら、泣いた。その涙は不思議でもなんでもなかつた。

それからの私は生きよつと思つて、ご飯を食べた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2493p/>

たんぽぽ

2010年12月9日02時51分発行